

優秀作品賞

「友ドックのおすすめ」

泉 真知子さん

親友の京子と一緒に人間ドックに行くことになったのは、偶然の成り行きからだった。

京子とは高校時代からのつきあいで、子供に手がかからなくなった10年ほど前からは、休みを合わせて、年に一度は旅に出る。その年も北海道に出かける予定だった。ところが私の会社の同僚が介護休暇に入り数日間続けて休める状況ではなくなってしまったのだ。結局共通の休みは1日だけ。日帰りバスツアーにでも行こうかと考えたが、ふと京子をドックに誘ってみようと思いついた。

私は、膵臓がんで若くして逝った母の分まで長生きするのが一番の孝行だと思い、健康には人一倍気を配っている。一方、京子は大柄で性格もおおらか、健康診断の結果も、やや血圧が高めであること以外大きな問題はなく、ドックには行った事がない。以前に誘った時には、「人間、いつか必ずお迎えが来るんだよ。ドックに入るより旅行にでも行ってストレス解消した方がずっといい」とあっさり断られてしまった。

だから、今回もドック入りをダメ元で提案してみた。すると、「それもいいかもね」とすんなり承知してくれた。前々からご主人に一度きちんと健診を受けるようにと言われていたのだという。

そして、当日。私が苦手な胃カメラをやっとの思いで終えて休憩フロアに行くと、京子はソファでコーヒーを飲みながらリラックスしている。はじめての胃カメラも、「私、人より胃が大きいのかな。全然平気だった」と笑っている。予定の検査は午前で終了し、昼食後に医師から検査結果の説明があった。

診察室から出てくる京子の顔がこわばっていた。医師からマンモグラフィー検査の結果についての詳しい説明があり、「出来るだけ早く精密検査を受け

るように言われたの。悪い病気だったらどうしよう」京子は不安そうにうつむいている。

『要精検』って言われる人は結構いるから、余りくよくよしない方がいいよ」そんな気休めの言葉しかかけられない自分もどかしかった。実はその数ヵ月前に、友人の妹が3人の子を残して乳がんで亡くなったのだ。まだ40代だった。

それから精密検査の結果が出るまでが、一番精神的に辛く、眠れない日が続いたと後に京子が話してくれた。数週間後、電話があった。ご主人と一緒に検査結果を聞きに行ったという。診断はごく早期の乳がん。部分切除手術が必要とのこと。たとえ早期であってもどんなにショックを受けたことだろう。京子の気持ちを想像すると、胸が詰まって言葉が出なかった。でも、彼女は、はっきり診断がつき、医師から詳しく聞いたことで気持ちが少し楽になったという。「とても話しやすい、親切な先生なの。良いお医者さんに出会えて良かった」と話してくれた。

ドックに行った時点で私たちは知らなかったのだが、マンモグラフィーを讀影したのは優秀な乳腺の専門家として名の知られた人だった。そして、その医師が京子の主治医となった。その点で彼女は非常に幸運だった。

リンパ節への転移もなく、手術は無事終了し、10日後に予定通り退院。働いているほうが気が紛れるからと、まだ少し傷口が腫れている時期に職場復帰した。抗がん剤は必要なく放射線とホルモン剤の治療を始めることになった。少し乳房が変形してしまったのが気になると言うが、明るい色の洋服を上手に着こなす京子はふくよかで若々しい。

京子は管理職として仕事に励み、この3月に退職した。定期健診の度に主治医から「あなたは精神的に強い」と言われるそうだ。

そんな京子が、先日カフェでお茶を飲んでいる時に窓の外の桜を見上げてつぶやいた。

「やっと5年たったのよ」

さりげない口調だったが、その言葉が胸に強く響いた。術後5年、それは京子にとってどんなに長い年月だっただろう。親友が無事一つの区切りの年を迎えられたことがしみじみうれしかった。

私たちは、京子の退職を記念してあの時行けなかった北海道に旅に出る予定だ。初夏の花々が風に揺れる富良野や美瑛の丘を訪れる日が待ち遠しい。

乳がんをはじめとして初期には自覚症状がない病気は沢山ある。健診を受けることで病気を未然に防ぎ、早期発見によって健康を回復することが出来る。でも、病気を指摘されるのが怖くて健診をためらう人の気持ちもよくわかる。それに、私たちの年代は子育てに仕事、介護等に日々忙しく自分のことは後回しになりがちだ。だからこそ、年に一度、決まった時期に時間を作り、自分の体とじっくり向き合いたい。

友人は一生の宝、共に人生を長く楽しむためにも、私たちのような「友ドック」をおすすめしたいと思う。